

吉野山の母恋し

辻 憲男（文学部教授）

「私」と津村は上市の町を歩いた。「かつて私の母も橋の中央に俣（くるま）を止めて、頑是ない私を膝の上に抱きながら、『お前、妹背山の芝居をおぼえているだろう？ あれが本当の妹背山なんだとさ』と、耳元へ口をつけて云った」。「まだ山国は肌寒い四月の中旬の、花ぐもりのした夕方、白々と遠くぼやけた空の下を、川面に風の吹く道だけ細かいちりめん波を立てて、幾重にも折り重なった遥かな山の峽（かい）から吉野川が流れて来る。その山と山の隙間に、小さな可愛い形の山が二つ、ほうっと夕靄にかすんで見えた」。歌舞伎の舞台では真ん中に川が流れ、兩岸に久我之助（こがのすけ）雛鳥（ひなどり）の高樓が向かい合う。相愛の男女の親どうしは仲が悪い…。「君、妹背山の次には義経千本桜があるんだよ」と津村が言った。親ギツネの皮が張ってある初音（はつね）の鼓。義経がそれを愛妾・静（しずか）に預けたので、子ギツネが忠信に化けて吉野山までついて来る。…我々二人はこれからその鼓とやらを見に、菜摘の里まで行くのである。

神戸岡本時代の谷崎潤一郎の名作『吉野葛』。初め計画した後南朝の歴史小説は出来ず、津村の母恋いの結婚話だけがまとまった。『妹背山婦女庭訓』（いもせやまおんなていきん）の「山の段」は久々に上演されたばかりだったから、上の思い出話は虚構である。作家には「母を恋うる記」という小説もある。『吉野葛』はもとより、千本桜も「葛の葉」も、また源氏物語以来の“永久に若く美しい母”の幻想なのであった。



奈良県吉野町上市の妹山（右）と背山。
「葛の葉」は安倍晴明の母・信太狐の伝説。